進め！

ニナ・カサレス戦車隊！！

郡山　伏郷

一九三九年　六月　十七日　〇八三七時

バル・ベルデ共和国　ラ・クルス駐屯地

「ねぇ、エルベルト少尉。エッチしましょうよ」

ニナ・カサレス戦車隊二号車操縦士であるノエリア・ベラ・ベルティ軍曹が、唐突に砲手のエルベルト・ディアス少尉に向かってそう言ったのは、十時から始まる閲兵式のためにソビエト製BT－5快速戦車の車体を洗い終えた二人が車内で休憩している時だった。

「って……おい、今か？」

馬蹄形の一九三四年型砲塔内で砲手席に

座ったエルベルト少尉は、車内の床に座っている小柄な女軍曹に驚いて聞き返す。

「今です。他に時間ないじゃないですか」

ノエリア軍曹は、イタリア軍を真似て作られた卵の殻のような大きな丸い鉄兜の下からエルベルト少尉を見上げた。

思わずエルベルトは周囲を見回す。もちろん、そんな事をしなくてもBT-5の狭い車内にはこの二人しかいないことはわかりきっている。

「もうすぐ式典始まっちまうぜ。次の演習までがまんしろよ」

なんとか思いとどまらせようとする少尉の言葉を聞いて、ノエリアは軽く頬を膨らませて反論する。

「がまんできないです。だって、少尉にエッチな女の子にされちゃいましたから」

「いや、そんな、オレが何かとんでもない事を仕込んだみたいに言うなよ。最初の時だって、お前が誘って……」

「あたし、あの時は『エッチしましょう』なんて言ってませんよ？　それなのに、少尉がやっちゃったんじゃないですか」

「お、おい、その言い方じゃ、オレがレイプしたみたいじゃないか」

エルベルトは初めてノエリアと関係した野営の夜の事を思い出した。たしかに彼女は『しましょう』とは言っていなかったが、ズボンを脱いでキスをしながら人の太腿の上に股をこすりつけて来たら、そういう事だと思うに決まっている。

「じゃあ少尉、とりあえずキスしてから考えましょ？」

ノエリアは話を変え、少尉の脚の間に入り込むと体をすりつけるようにして膝立ちになりながら言った。エルベルトの胸元で、ノエリアの子供っぽい丸い目が車内灯の淡い光を反射してキラキラと光る。

（……あぁオレは、またこの子のペースにはめられちまうな）

そう思いながら、エルベルトは体を丸めて唇を重ねた。

――っちゅ……

途端に、ノエリアが素早く舌をのばし、エルベルトの口の中へと入れた。片手を少尉の首の後ろに回して逃げられないようにし、エルベルトの舌の先をちろちろとなぶり大胆に口の中を舐めまわす。

式典のために久々に被った制帽の庇が、ノエリアのヘルメットにぶつかって小さな音をたてる。

気が付くと、ノエリアは手を伸ばしてエルベルトの股間を下からそっと触っていた。そして、ゆっくりと手の平全体で、まだ柔らかいそこをなで上げる。

（なにが『とりあえず』だ、もうすっかりやる気じゃないか）

ノエリアが全身を押しつけたまま、手の平で数度こすり上げるうちにそこは硬くなり、エルベルトの抵抗もそれと同時に終わってい

た。

「ね、エッチしましょう？」

彼女は絡めていた舌をほどいて唇を離し、少し首をかしげてもう一度尋ねる。

エルベルトは脱いだ制帽を雑具入れになっている砲塔後部へ放り込むと、返事をする代わりに噛み付くようにもう一度ノエリアと唇を重ねた。

「んっ……」

喉を鳴らして混ざり合った唾液を飲み込んだノエリアは、そのまま手を伸ばすとエルベルトの首に回していた手をほどき、少尉の制服のベルトをバックルから抜いた。そして、細い指で制服のボタンをいくつかとズボンの前のボタンを外し、腰紐をほどいて下着を押し下げる。エルベルトの硬くなった男性器が勢い良く立ち上がった。

「少尉、車長席の方に座ってもらっていいですか？　こっちだと発射ペダルが邪魔なんです」

嬉しそうに勃起を手に取ったノエリアは唇を離して少尉を見上げ、四十五ミリ主砲の発射ペダルが取り付けられた鉄棒を指さしながら言った。

（式典前にこんなことして……ただでさえ殺されかねないのに、わざわざ車長席でやってるところを見つかったら……）

エルベルトは、彫りが深く目つきのキツい女車長のことを思い出した。あの、とにかく喧嘩っぱやく男勝りの女性士官にみつかれば、ただ事では済まないに決まっている。

だからと言って、今さら思いとどまる事などできるはずもない。エルベルトは砲塔左側の砲手席から降りると右側の車長席へと座りなおした。

「いただきま～す♪」

エルベルトが軽く脚を開くと、ヘルメットを脱いで砲尾の上へのせたノエリアがその間にしゃがみこみ、一気に口の奥までくわえこんだ。

――ちゅぷぅ

肉棒の根元から先端までがねっとりと温かく覆われた。亀頭に絡む舌の温かい感触と、根元に触る歯の冷たい感触。緩やかにウェーブのかかった黒髪をきっちりと後ろでまとめたノエリアの頭を両手で抱え、思わず前かがみになる。

町の商売女の、慣れきったいい加減な性技なんかとは比べ物にならない丁寧な舌使い。うまい、へた、で言えばへたなのかもしれないが、時々視線を上げてエルベルトの様子をうかがうノエリアの子供っぽい表情の前では、技巧の良し悪しなどあまり関係なかった。

（可愛いな、こいつ）

少し顔を上げて目が合ったノエリアは、口の中に先端をくわえこんだまま少し微笑んで顔を伏せ、口全体で肉棒を吸い上げるように締め付けながら頭を上下させ始めた。

――ぐちゅぅ……くちゅ……

ゆっくりと上半身を動かしながら、捻るように首を動かして全体を刺激する。口での奉仕は気持ちよかったが、あまり続けていると挿入で長くもちそうにない。

「おい、あんまりやられるとこれだけで終わっちまうぞ。セックスするんだろ？」

指先で軽く頭を叩くと、ノエリアは口を離し舌先で亀頭の広がりの裏側を数度つつくように舐めてから、嬉しそうにニンマリと微笑んだ。

エルベルトは、この少女のような小柄な女軍曹を気に入っているし、彼女と深い仲となったのもまんざらではないと思っている。多分、このくだらない軍隊ごっこもそのうちに辞めて二人で暮らす事になるだろう。

だが、時々……この無邪気な瞳で彼を見つめてくる童顔の小娘に、自分はいいように遊ばれているのではないだろか、とも考えてしまう。

（まぁ、それでもいいさ）

立ち上がったノエリアを抱き寄せ、彼女の着ている旧式なダークブルーの制服の前を捲り上げて装具用のベルトを上へずらす。彼女は小柄な体に大きすぎるズボンの裾を詰めて履いているために、やたらと股上が深い。そこに並ぶボタンを外したエルベルトは、ズボン吊りを外してズボンを下げた。そして、やっとあらわになった下着のズボン下の腰紐をほどき、その中へと手を入れる。

「あっ……」

奥まで手を差し入れるとノエリアが短い声を漏らした。滑らかな下腹部の膨らみの下、控えめな茂みの中の熱く濡れた感触が指先に伝わる。

「ノエリア、もう濡れてるぞ」

「うん……だって、口でエッチしながら、いっぱい触っちゃったから……」

エルベルトは、ひときわ強くノエリアを抱き寄せると、下腹まで差し入れた手の指を一本、熱い秘裂の中へと侵入させた。

「んっ……」

きゅっ、と吸い付くように締めつける柔らかい肉の穴。エルベルトはノエリアの甘い声を聞きながら、指の腹で淫核の膨らみをこすりつつ指を奥まで入れる。

ノエリアは、全身の力を預けるようにエルベルトへともたれかかった。華奢な、軍人とは思えない細い体。

エルベルトはノエリアの首筋から制服の背中に手を這わせ、裾の長いシャツを捲くり上げると彼女のかたい尻へ手を伸ばした。

その間にも、もう片方の手では性器の奥深くまで入れた指をゆっくりと動かし続けている。指の根元まで、粘液がねっとりと伝った。

「ねぇ少尉……指じゃなくて……挿れてください……」

エルベルトの体にしがみついたノエリアが囁くように言った。

「よし……ノエリア、そこに座れ」

エルベルトは椅子から降り、代わりにノエリアを座らせた。できれば彼女の細い足首を掴んで広げ、思い切り奥まで突きまくってやりたかったが、足首の巻きゲートルをほどいてズボンを脱がすのには時間が足りない。

仕方なく膝を押してなかば強引に太ももを開かせると、細い腰を両手で掴んで少し手前に引き寄せ、椅子のふちから下腹を突き出させる。

「挿れるぞ」

エルベルトは硬くなりきった肉棒の先端をノエリアの濡れた入り口にあてがうと、膝を使ってすくい上げるように下から突き上げた。

「あんっ！……少尉の……入った……」

狭い肉穴がすぐに肉柱を締め付けてくる。締め付けがきつい、というよりも彼女の場合は性器のつくりそのものが小ぶりなようだ。身長も、胸も、そして性器のつくりも小さい可愛い女軍曹。

温かい粘液が、たちまち二人の交わりの間に満たされていく。

腰を引くと先端の広がりでかき出された粘液がぬるりと溢れるのを感じた。

（……車長席べたべたになっちまうな……）

しかし、もう止めることはできない。エルベルトはゆっくりと腰を動かし、ノエリアの体内を堪能する。

「いっかい、奥まで、奥まで入れてください、少尉」

ノエリアがエルベルトの制服の脇を両手で掴んで言った。エルベルトはそれを聞いて、腰をこすりつけるように奥までぐっと突き入れる。

――ぐちゅぅ

先端が、彼女の体の奥に当たった。

「あんっ！」

彼女の体の奥に隠された、さらに奥への入り口が抵抗するかのように押し返してくる。

エルベルトはノエリアに軽く口付けをして

から、制服の下に手を入れてシャツの上から胸を触った。彼女の胸の膨らみは少女のように小さいが、シャツの上からでもはっきりとわかるほどにその先端は硬くなっている。指でそれをつまみ、軽くつねるように刺激する。

「あん……少尉ぃ……」

軍曹の体がびくんと震え、濡れた肉壁全体がぐっと少尉の肉棒を締め上げる。

砲塔内壁から吊り下げられる形で取り付けられた椅子がギシギシと金属音を立てるのを聞き、エルベルトは数回ゆっくりと突き上げてから、手を制服の中から抜いて体を離した。

「あん……少尉、もっと、このまま、ずんずんしてください」

愛液に濡れた肉棒がぬるりと抜ける感触に、ノエリアが不満そうに言う。

「いや、あんまりやって椅子をぶっ壊すと本当にまずいって。オレの席ならまだしも、車

長の席ぶっ壊したら二人とも銃殺もんだぜ」

エルベルトはノエリアの手をとって立たせると、車長席をまたいで後ろを向かせた。

「……車長も、エッチしてるのかな？」

ノエリアが、車長席に零れた粘液を手でぬぐいならなんとなく言った。

「あの体だからな、未経験ってことはないんじゃないか？」

「中佐のおっぱい、すごいもんねー。いいなぁ……」

軍曹の言葉につられて、エルベルトも女車長の体を思い浮かべた。小柄なノエリアとは対照的に長身で胸が大きく、軍服の上からでもはっきりとわかる官能的な肉体。あの大きな胸なら、小ぶりな胸のノエリアにはできない性技も試す事ができるだろう。だが、あの気性の激しい女性士官が足を開いて男に組み伏せられている姿を想像することは難しかった。

（きっと、あっちの方も大雑把なんだろう

な）

なんとなく、他の女性の事を考えているのを気まずく思ったエルベルトはその考えを振り払うように、背後からノエリアの制服の中へ手を入れて小さな乳房を愛撫した。

「いいじゃないか、車長のことはどうだって」

「あん……」

そして、もう片方の手を伸ばしてノエリアの秘部にそっと触る。薄い陰毛の茂みの中で、柔らかい肉のひだが少尉の挿入を待って濡れていた。

「もう、どろどろだぞ」

「だって……少尉のが、奥にずぅーんって、入って……もっと、どろどろにして欲しいです」

「スケベな体だな」

「少尉に教えられたんですよ？」

確かに口や手での性技を教えたのは彼だが、積極的に知りたがったのはノエリアの方

だ。

「もともと、そういう事が好きだったくせに」

「そんなこと……あんっ！」

エルベルトは言い返す間を与えずに、後ろから膝を使って勢い良くノエリアの性器を怒張で突き上げた。肉の割れ目を押し広げた丸い亀頭がノエリアの体の奥を押し上げる。全身がふわっと浮く様な、甘美なめまいがノエリアの意識を震わせた。

エルベルトは膝と腰を使って、勢い良く後ろからノエリアの体を突き上げはじめる。

「あっ、あっ、あっ」

ノエリアが上ずった声を上げながら、砲塔内に立てて収納されている四十五ミリ砲の砲弾にもたれかかった。

――ちゅ……くちゅ……

性器が濡れて擦れる音が、聞こえる。

ノエリアがなにかを我慢するかのように、強く首を振ってからがっくりと深く首を前へ

曲げた。

それを見て、エルベルトは両手で腰を抱えて思い切り深くまで突き入れる。弾かれたようにノエリアが頭を跳ね上げ、大声であえいだ。

「あっ！　気持ちいいっ！」

「おい、いきなり動くと頭ぶつけるぞ」

「だって！　だってぇ！」

ノエリアの内股が震える。仕方なく、エルベルトは手を伸ばして砲尾の上からヘルメットを取ると、軍曹の頭に被せた。大きすぎるヘルメットの、ほどけたままの顎紐を揺らしながらノエリアは口を開けて犬のように激しく息をする。

彼女の肉の薄い子供のような尻を引き寄せると、奥まで入り込むのを感じた。そんなに巨根自慢、というわけでもないエルベルトが後ろから侵入して子宮をぐいぐいと突き上げられる体格の女性など、そうそういない。

「あんまり、あんまり激しく、やったら、戦

車が揺れて、ばれちゃうよぉ……」

ノエリアが、激しく突き上げられながら切れ切れに言った。

「お前、体重いくつあるんだよ。この戦車十二トンもあるんだぞ。これぐらいで揺れるもんか」

エルベルトは構わずに激しく突き上げる。

ノエリアの腰が、逃げるようにくねった。もちろん、逃げようとしているわけがない。

少し、腰を引いて入りを浅くし、しばらく彼女のうごめくのに任せてから一気に奥まで挿れる。

――ずちゅ

「んぅーっ！」

体の奥を丸い先端でぐっと押し上げられ、ノエリアは崩れるように頭を下げた。立てられた砲弾の真鍮製薬莢にヘルメットがぶつかって金属音を立てる。

「もっと……もっと、ずんずん……してください……」

少しの間じっとしているとノエリアが小声で言った。それを待っていたかのように、エルベルトは思い切り彼女の腰を引き寄せると、背中を丸めて勢い良く何度も突きこむ。

（このまま、イっちまおう）

そう思った瞬間だった。

――ガンっ！

突然、鈍い金属音と共に、ノエリアの全身が緊張した。性器の柔らかい肉壁が肉棒を硬く握り締めるように収縮する。

「あ、痛ったぁ……」

顔を上げると、ノエリアが両手で頭に被ったヘルメットを抱えていた。どうやら、砲塔内壁から防弾ガラスの厚みだけ内側へ突き出した貼覗孔の角に頭をぶつけたらしい。

「だからお前、言ったじゃないか。ヘルメット被ってて良かったな」

「だって……夢中になっちゃって……」

エルベルトは軍曹のヘルメットを平手でピタピタと叩きながら、ついでに貼覗孔から外

を見た。すでに、修理隊の技術兵達が並び始めている。

「まずいな……」

「どうしたんですか？」

「もう修理隊が並んでる。早く済ませちまおう」

エルベルトはノエリアの体を捻って貼覗孔を覗かせる。ちょうど、車輌のすぐ横を一人の兵士が通り過ぎた。

「装甲板の向こうにみんないるのに、あたしたち、エッチしちゃってるんだ……なんか、凄い……」

ノエリアはうっとりとした口調で言った。もう頭をぶつけた衝撃からは回復したらしい。エルベルトは醒めないうちに、と再び彼女の体に奥まで挿入した。

「あっ！　いっ……いいっ！　気持ちいいっ！」

ノエリアが、貼覗孔から外を見ながらあえいだ。

「おい、もういいだろ」

エルベルトは体を斜めにして貼覗孔を覗いているノエリアの体の向きをなおさせた。そして、一層激しく彼女の尻に腰を押し付けるようにして体を奥から突き上げる。

「すごいな。やたらと締め付けてくるぞ」

「だって、だって、なんだか、みんなに見られてるみたいで……」

ノエリアは、並べられた砲弾にヘルメットを被った頭を押し付け、体の奥まで繰り返し少尉を迎え入れる。

縮こまるように丸められていたノエリアの背中がゆっくりとそりかえり、首が上を向き始めた。軽く爪先立ちになった足が震え、肩が目に見えてわかるほどに震えている。

「あっ……きっ……もち……いっ……」

もはや、ノエリアの声は言葉にならない。首を前後に揺らすのにあわせ、ヘルメットが小刻みに砲弾に当たって金属音を立てた。

エルベルトは次第にずれていくヘルメット

の縁を引っ張ってなおしてやり、思い切り彼女の体の芯を突き上げる。

「ノエリア、出すぞ」

エルベルトが一気に奥へ欲望を放出しようと声をかけると、突然、ノエリアが振り返りざまに手を伸ばしてエルベルトの体を押した。

「待っ！　ダメっ！　ダメ！　中はダメですっ！」

ノエリアに初めて拒否された事に驚きながらも、慌てて下腹にぐっと力を入れながら体を離す。咄嗟の力の入れ方がおかしかったのか、会陰から背中へ鈍い痛みが走った。

「あの、今は、中はダメです……」

ノエリアは向きを変えてエルベルトの方を見ると、申し訳なさそうに言った。

「だって……少尉いっぱい出るから、閲兵中に溢れてきちゃうじゃないですか……」

やはり、彼女は無邪気なようでいて、なかなか細かい。

「あの、口に、ください」

床に座り込んだノエリアが、彼女自身の愛液でぬるぬるになったエルベルトの性器を両手で根元からしごき上げながら言った。

指先で丸い亀頭をなでまわしてから、ゆっくりと裏側をなめあげ、舌先で先端の割れ目をつついて口の中へとくわえこむ。

土壇場で止められたので、そう長くはもたないはずだ。

エルベルトはノエリアのヘルメットを脱がし、もう一度砲尾の上へのせた。ノエリアは亀頭全体をねっとりと舌で舐め回してから、黒い瞳でエルベルトを見上げる。

そして、口を開けて舌先でちろちろと先端を刺激するさまを見せつけ、もう一度奥深くまで口の中へとくわえこんだ。

それだけで、もう限界だった。

「出すぞ！」

音がするような激しい射精が、ノエリアの上顎を打った。

思わず強く目を閉じたノエリアがすっと力を抜いて、根元から大きく舐め上げる。

それに誘われるように、二度、三度、ノエリアの口の中へ勢いの良い射精がぶつかった。

エルベルトは深く息をつくと、いつのまにかしっかりと両手で押さえていたノエリアの頭をそっと放す。

ノエリアは口の中全体に舌で塗りつけてゆっくりと味わってから、精液の絡んだ舌を出して少尉に見せ、うっとりとした表情でそれを全て飲み込んだ。

「すごい……濃いの、いっぱい出ましたね」

その時、車体前方からハッチを開ける金属音が車内に響いた。

――ギィ

二人は慌てて体を離す。

エルベルトがズボンと下着をまとめてずり上げながら屈みこんで車体前を見ると、女性車長のメルセデス・ロッシ中佐が操縦席正面

装甲の操縦席ハッチを開けて車内を覗き込んでいた。

「おい、お前ら。そろそろ整列しておけよ」

中佐はそれだけ言うと、再びハッチを閉めた。

「見えちゃった……かな……？」

ノエリアが、恐る恐るといった様子で尋ねる。

「いや、中は暗いから見えてないだろ」

エルベルトは、半ば自分を安心させるために言った。

それに、見えていたらさすがに何も言わない、という事はないだろう。

身なりを整えたノエリアとエルベルトが車体前のハッチから出ると、すでに駐屯地の兵士達はほとんどが整列を終えていた。慌てて、二人も二号車の前に並ぶ。

「二号車」といっても、中米の小国であるバ

ル・ベルデ共和国陸軍は今ここに並んでいる二輌しか戦車を保有していない。この二輌のソビエト製BT－5戦車は、ムッソリーニ統領に心酔するカサレス大統領が、イタリア軍を真似てスペイン内戦に遠路はるばる送り込んだ義勇軍の健闘を称え、ファシスト軍が保有する鹵獲車輌の中から供与されたものだった。

ファシスト軍を率いるフランコ将軍にしてみれば、数が少なすぎて部隊編制ができず使い道のないガラクタを押し付けたのかもしれないが、それでも戦車を手に入れたカサレス大統領は得意満面で「共和国戦車隊を編制する」と堂々宣言し、装備車輌たった二輌の冗談のような戦車隊に娘の名前、ニナ・カサレスの名を与えたのだ。

そして、本日は名前の主であるニナ・カサレスお嬢様直々に隊の誕生を祝い、新調された隊旗を授けてくださるということだった。

ノエリアとエルベルトの前へ来た二号車車長、メルセデス中佐はまぶかに被り顎紐までかけた制帽の庇の下から二人に鋭い視線を走らせて服装を確認する。

青いシャツに青いネクタイを締め、襟の開いたカーキ色の制服を着た彼女は、男としては標準的な身長があるエルベルトよりも十センチほど背が高い。

腰を絞る革ベルト、肩から斜めにかけた斜革、短靴の上にベルトで留めた革ゲートル、そして私物のリボルバー拳銃を納めた革ホルスター、全てが念入りに磨かれて光っている。彼女は普段はあまり服装に気を使わない方だが、こうして正装をすると雰囲気ががらりと代わる。

しばらく、中佐は二人を睨むように見ていたが、特に言う事も無かったのかそのまま何も言わずに向きを変えると、エルベルトに背を向けてその前に立った。

二輌の戦車の前に、それぞれの砲手と操縦

士が並び、一歩前の位置に二人の車長が並んで中央に立つ。

メルセデス中佐の隣には、一号車車長でニナ・カサレス戦車隊の隊長でもあるアマラント・バルリオス大佐が立っていた。がっしりとした体つきの男で、スペイン内戦にも派遣されたバル・ベルデ共和国陸軍でも屈指のベテラン軍人だ。

二号車の乗員が整列を終えてすぐ、駐屯地入り口から大統領の娘、ニナ・カサレスが基地司令官達を引き連れて入って来た。ニナは真っ白い地に青い線がアクセントに加えられた、見るからに高級そうな仕立ての軍服を着ている。

しかし、その豪勢な身なりよりも一層目を引くのが、彼女の白い肌と制帽の下から背中に流れる真っ直ぐな長い金髪だった。

この国で、金髪を見る事は珍しい。大統領も黒い縮れ毛に浅黒い肌だが、その娘は大統

領夫人であるアメリカの大実業家の跡取り娘に似たらしい。大統領と夫人、双方とも金と権力が目的の打算的結婚だった割には、神は大層気前のいい贈り物をしてくれたものだ。

ニナの到着を見て軍楽隊が国歌の演奏を始め、兵士たちは一斉に庇に指を当てて敬礼しながら斉唱する。

――バル・ベルデよ　汝に敬礼せん！

歌いだしてすぐに、エルベルトは自分達の車長が前を向いたまま隣のバルリオス大佐に話しかけている事に気がついた。

「おい、変態野郎。食堂の子の鼻の骨折ったのてめぇだろ」

大佐も、じっと敬礼をして前を向いたまま言葉を返す。

「抵抗するからだ。気持ちよくしてやろうというのに」

「抵抗なんかしなくても殴るんだろ？　てめぇは血を見るのが大好きだからな」

「あぁ、好きさ。今すぐお前の内臓をこの場

にぶちまけて、大統領の娘に内臓ファックを見せてやりたいぐらいだ」

「バーカ、てめぇのウンコ食って死にやがれ」

国歌は一番が終わり、二番へと入る。

――汝の空に　平和を美しく輝かせん……

「そういう態度をとると、必ず後悔するぞ」

「うっかり戦車隊に入ったせいで、ゲスな変態野郎と横に並んでる以上に何を後悔しろってんだ？」

「私は、お前らが生まれてきた事を後悔するような目にあわせることもできるんだぞ。まず手始めに、あの軍曹から可愛がってやろうか？」

「うちの子に手を出しみろ！」

思わず声が大きくなった中佐を、周囲の兵士が国歌を歌いながらも何ごとかと思いチラチラと覗き見る。

「国歌斉唱中にでかい声を出すな、みっともない」

「いいか、うちの子に手を出したら、てめぇの尻から機関銃突っ込んで全身バラバラになるまで鉛弾でレイプしてやるからな。覚えておけよ！」

そこで、国歌の演奏が終わった。

式典そのものは、決められた手順通りに進展した。

大統領の娘からどうでもいいような訓辞があり、新品の隊旗が大佐に手渡される。そして、二人の車長の襟にニナが直々に戦車隊徽章を留めた。

しかし、式典の最後になってちょっとした混乱があった。

ニナは最後に、一号車に乗って演習場を一回りすることになっていたのだが、一号車の前でバルリオス大佐の顔を見たとたんに彼女は二号車に乗りたいと駄々をこねはじめたのだ。

「しかし、ニナ様が乗ると聞いて、乗員達も

張り切っていますし……」

大佐はなんとかして予定通りに一号車へ乗ってもらおうと説得を試みるが、ニナは聞く耳を持たない。

「今日のお星様は二号車に乗るように言っています。土星と金星の位置が、わたしに二号車に乗れと告げているのです」

「ほ、星い…？　いや、しかし……」

「わたしの言う事を聞けないのなら、パパに言いつけますよっ！」

大統領の娘は両手を腰に当てて精一杯胸を張ると、強い口調で言った。

「わかりました、わかりました……」

大佐は仕方ない、というように肩をすくめると二号車へと向かい、手早く事情を説明した。

「了解しました。途中で姫様が射撃を見たいと言われたらどうしますか？」

さっきあれだけ険悪なやり取りをしたばかりとはいえ、メルセデス中佐も周囲の兵士達

の手前、上官に対する態度を守る。

「そうだな……射撃場の方ででも、少し見てもらえ」

「了解しました」

「待て」

敬礼をして、くるりと向きを変えた中佐の肩を掴むと、大佐は耳元で囁くようにつけた。

「絶対に時間までに戻れ。戻らなかったら、頭蓋骨に穴を開けて脳髄ファックしてやるからな」

それに対し、メルセデス中佐も小声で答える。

「ウンコ食って死ね」

中佐は戦車に戻ると、予定が変わり大統領の娘が二号車に乗る事になったと少尉に告げた。そして、自分は転輪に足をかけて車体後部へ上がる。

「じゃ、後はよろしく。アタシは後ろで寝て

るからお姫様は少尉が相手してくれ」

「えっ、オレですか？」

「ああいうお高くとまった女はアタシには手に余る」

砲塔後部の弾薬補給用のハッチを開け、制帽と外したネクタイを突っ込みながら中佐は答える。

その時、ニナが二号車の方へとやってくるのが見えた。メルセデス中佐は急いで先を続ける。

「それから、できるだけゆっくりと走れ。なんだったら、途中で演習場抜け出してどっか寄り道してこい」

「みなさん、よろしくお願いします」

大統領の娘が、二号車の乗員達に軽く頭を下げて挨拶をした。

「あ、こちらこそ、よろしくお願いします。それでは、えっと……上から入っていただくことになりますので」

ニナを引っ張り上げるために、エルベルト

は先に車体後部の上へと登った。そして、中佐と二人がかりでニナが車体に上がるのに手を貸す。

「どうぞ、こちらへ……先に、自分が中に入ります」

エルベルトは砲塔天井の車長用、砲手用の両ハッチを開けて開口部を広げてから砲塔の中へ入った。そして、車体の上で、ものめずらしそうに足元を見ているニナを呼ぶ。

「どうぞ、中へ」

「それでは、お邪魔します……中佐さん は？」

「砲塔の中が狭いので、車長は外で待機します。一旦、椅子の上に立ってください。床に直接下りるのは危険です」

砲塔天井へ登ったニナは、エルベルトに両手で腰を支えられて天井から一メートルほど下の車長席の上にとん、と降り立った。

（うわ……肌、真っ白だな……）

淡い褐色の肌のノエリアと比べるまでもな

く、ニナに肌は本当に白い。真っ直ぐな髪も、近くで見ると透き通るような色をしている。

「ハッチは閉めなくて結構です。そのまま、その席へ……いや、やっぱり、こちらへ座ってください。砲尾に気をつけて……」

エルベルトは最初は広い車長席の方へ座らせるつもりだったが、土壇場になって車長席がさっき軍曹の愛液でぬるぬるになった事を思い出した。一応ぬぐったとはいえ、そこへ大統領の娘を座らせるのはなんだか気が引けて、急いで車内に屈みこんでニナと位置を変わる。

「少尉、エンジンかけまーす」

車体前端の操縦席に座ったノエリアが、狭い車内で位置を入れ替えるために操縦席の脇へと体を突っ込んできたエルベルトの袖を掴んで言った。そして、クラッチとブレーキのペダルを思い切り踏み込んでから操縦席左側の内壁に取り付けられた計器盤の角にあるボ

タンでエンジンを始動させる。

車体後部から鈍い駆動音が聞こえ、数度低い破裂音がしてから十二気筒M5ガソリンエンジンが回転を始めた。

「すみません、無理を言ってしまって。一号車に乗る予定だったのを、わたしのわがままで……」

エルベルトが車長席に座ると、ニナが話しかけてきた。

「ああ、自分達は別に構わないですよ」

「あの一号車の人たち、なんだか、目が怖かったので……あっ、内緒にしておいてくださいね」

ニナが慌てて指を一本立てて口に当てた。

「えぇ、大丈夫です」

エルベルトはニナの意外に子供っぽいしぐさに思わず微笑むと、つま先で軽く操縦士の椅子の背中を蹴った。

「軍曹、お客様もいることだし、低速で行こう」

「了解。低速前進します」

ノエリアがブレーキを放し、そっとクラッチをつなげると戦車はゆっくりと前進を始めた。

「この望遠鏡みたいなので、敵を狙うのですね？」

一方、ニナは機器に埋め尽くされた砲塔の中が珍しいらしく、目に付くものに片っ端から興味を示していた。

「そうです。走行中は振動が激しいので、見ないほうがいいですよ。酔いますから」

「これは、砲塔を回すハンドルですか？」

「はい。それを回すと砲塔が回って、後ろに乗っている車長が転げ落ちて、オレが後で滅茶苦茶怒られます」

エルベルトの答えを聞いて、ニナは軽く口に手を当てて、くすくすと笑う。

（なんだ、大統領の娘って言っても、その辺の女の子と変わらないじゃないか）

「えらいご機嫌なご様子で」

しばらくして、砲塔の中から聞こえる仲の良さそうな話し声に誘われてメルセデスが開け放したままの砲塔天井ハッチから覗き込んできた。

「あぁ車長、ちょうど良かったです。お嬢様が、屋台のものをなにか食べてみたいって言うんですけれども、町に向かっていいですか？」

「あのっ、隊長には、わたしがわがままを言って逆らえなかった、と言ってもらって結構ですので……」

ニナが慌てて少尉を遮るように言った。

「別にいいんじゃないか？　腹も減ったし、昼飯でも食うか」

「それじゃあ、ちょっと寄り道しましょう」

中佐の答えを聞いて、エルベルトは座席の上で背中を丸めて屈みこむと操縦席に座る軍曹の背中に向かって言う。

「軍曹、町へ向かってくれ。柵は壊してし

まってかまわない」

「了解。戦車、町へ……」

「アヴァンセ！（前進！）」

少尉と軍曹は声を合わせて言った。

「今のは？　戦車隊の合言葉ですか？」

体を起こしたエルベルトにニナが尋ねる。

「いや、車長の口癖の真似ですよ。あの人は演習では二言目には『前進！　前進！』ですから」

エルベルトは上を軽く見上げ、砲塔に両手をついて前方を見ている中佐を指さして言った。彼女は、前髪を長く残して襟足を短めに切った黒髪が風に乱されるのを、時々手でなおしている。

「あっ、そうだ、わたしが命令出した形にしないといけませんね」

ニナが思い出したように言った。

「二号車、町へ！」

彼女は、楽しそうな声で車内に聞こえるように言うと、少し照れくさそうに付け足し

た。

「アヴァンセッ！」

ニナ・カサレス戦車隊二号車は、演習地の柵を押しつぶして外の道へと出ると、そのまま町へと向かって走り出した。

体験版はここまでです。